四国の天理教

天理大学附属天理図書館
天理教文献室
早田　一郎　*Ichiro Soda*

四国は４県ある。伝道史的観点でみると、その東半分である徳島県と香川県が現撫養大教会系統の伝道、西半分の高知県と愛媛県が現高知大教会系統の伝道結果であり、明確に二つに分かれ、ほとんど混じり合うことがなかった。

もう少し詳しく言うと、撫養大教会から分離して大教会になった所が８大教会ある。その内４カ所が徳島県、２カ所が香川県にある。すなわち名東、南阿、阿羽、国名（以上徳島県）、香川、高松（以上香川県）の各大教会である。そして徳島県全教会に対する撫養系統教会の割合は 75 パーセントにのぼり、香川県では同じく 38 パーセントにのぼる。

一方、高知大教会から分かれた大教会は全部で６大教会であり、かつそれらは全て高知、愛媛の両県に存在している。すなわち高岡、繁藤、伊野、越知（以上高知県）、川之江、愛豫（以上愛媛県）である。また、高知県全教会に対する高知系統の教会割合は 92 パーセントであり、同様愛媛県も 80 パーセントが高知大教会を元として始まった教会である。

四国はこのように、その多くが撫養と高知の二つの教会から始まり、それぞれ東の２県（撫養系統）と西の２県（高知系統）に明瞭に分かれており、現在に至っていることが分かる。

撫養と高知の始まりを述べよう。二つの大教会の始まりは共に大阪である。撫養大教会初代会長、土佐卯之助は山口県出身の船乗りで、入信当時（明治 12 年）徳島県撫養町（現鳴門市）に住んでいた。船主から信頼され、北前船の船頭も勤めた。大阪の木津川河口にある三軒家（本連載６「大阪の天理教」参照）で入信。三軒家の講である真心組（現西大教会）に入った。

天下の名医と言われた緒方洪庵からも治る見込みがないと宣告された大患の心臓脚気を信仰によりたすけられ、明治 12 年秋、初めておぢばに帰った。身上をたすけて頂いたお礼に灯籠か鳥居の献納を申し出たところ、居合わせた山澤良助に「何も要らん。人だすけに身を捧げるよう」諭され、最後の教えの真髄に触れ、これこそ本当の神様だと得心したという。

講元の博多藤次郎から熱心に教理を聞き信仰を深め、明治 14 年に撫養町で阿波真心組を結成し、おたすけ活動に入った。卯之助のおたすけは鳴門や徳島の町、さらに吉野川沿いに展開され、順調に広まっていたが、徳島市の布教師からある行者がおたすけの妨害をして困るとの相談を受けた。

卯之助は、自らその行者に会うことにした。行者の名前は柏原友吉と言い、修業を重ねた強者で金縛りの術を使うという。妨害に悩んでいた本教布教師たちは柏原の術の前には手も足も出なかったらしい。柏原は相当なやり手であった。

卯之助は柏原に「神は法や術はきかない、誠真実が人をたすけるのだと教えられる。私に金縛りをかけてみて下さい」と言った。対して柏原は「これからの世の中は法や術ではなく、あなたの言われる通り誠真実が人をたすけるのでしょう。あなたには術など効きません」と天理教の信仰に入ることを宣言したという。この現場に居合わせた人はどんな思いでいたのだろう。二人の巨人のやりとりに身震いしたのではないだろうか。

土佐卯之助、柏原友吉およびその弟子たちのおたすけ活動は徳島県のみならず香川県、山口県へと伸びいくつもの大教会を生み出すこととなる。

高知大教会初代会長になる島村菊太郎は現在の高知県南国市に生まれ、成人して酒造業などを手がけたが、後大阪に出て海産物商を営んだ。しかし痔を煩い、商売も思うに任せなくなる。

そんな島村を見て同郷の知人で、すでに真明組（後の芦津大教会）の信者であった都築竹治が入信を勧めてくれた。最初は信仰で痔が治るなどあり得ないと信じなかったが、病状が進みどうしようもなくなり、明治 21 年都築に入信を誓い神様の教えをむさぼり聞いた。歩くのも困難な身体であったが、おぢばへ帰り信仰を深めた。

やがて医者でも治らない痔を信仰によってたすけられた島村は「千人たすけ」を心定めし、高知へ帰った。おたすけが忙しくなると都築にも応援を頼み二人で高知の町を歩いた。さらに真明組の先輩たちにも応援を求め、一緒に高知でおたすけをした。

明治期、高知県は高知市に県の機能が集中し、大きな病院も高知にしかなかった。明治 24 年、高知分教会が設立され、短時日に高知県内に広まったのは、所用や病気治療で高知に来た人たちが天理教の教えに触れ、またたすけられて自家のある県内各所に伝えたからだともいう。高知県に広まった本教は山を越え愛媛県へと伝わる。

以上、大雑把に四国の天理教を概観したが、四国は土佐卯之助に始まる撫養の信仰と島村菊太郎に始まる高知の道が四国をほぼ半分に分けるような結果となっている。なぜこうなったのだろう。理由は単純ではなく、いくつかが絡み合っているのであろう。しかし、その大きな理由として二つを考えることができる。一つはそれぞれの初期伝道者の力。もう一つは四国の自然地理が影響していると思われる。

撫養系統の伝道者は土佐、柏原のほか正木國蔵や麻植房次郎などの伝道者が活躍し、高知系統も島村のほか都築竹治、葭井与一、土居嘉七などがおたすけ活動に邁進し、またたく間に徳島、高知県内に広まった。初期伝道者の功績は大きい。

もう一つが四国の自然である。高知と徳島の県境には急峻な山岳地帯が連なり、本教の伝道活動期である明治から大正期には徒歩以外の交通手段がほとんどなく、行き来するには大変な困難があった。短時日に徳島県内に撫養系の信仰が広まり、同じく高知県内に高知系の信仰が広まったが、それは県境の地理的条件のため混じり合うことがなかったのであろう。これが現在の状況、すなわち徳島、香川の２県に撫養系統の教会が多く、高知、愛媛の２県に高知系統の教会が多いという理由の一つであろうと考えられる。

最後に徳島県、香川県、愛媛県の他系統について若干述べておく。徳島には芦津大教会の系統教会と日和佐分教会系統の教会がある。また香川県には本島大教会、双名島大教会、鐸姫分教会があり、それぞれの系統教会がかなり存在している。また愛媛県には東大教会、中河大教会系統の教会もある。今回のテーマ「四国の天理教」から言えばもっと触れなければならないところだが、撫養、高知両系統の話に限定したため書くことを控えた。さらに四国の伝道については、島嶼地域の伝道など興味深いことが沢山ある。別の機会に書きたいと思う。